

---

# \*花と水\*

比奈乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

\*花と水\*

### 【Nコード】

N1119C

### 【作者名】

比奈乃

### 【あらすじ】

双子のアマネとカサネ。二人はいつつもしょにいる小学四年生の仲良し姉妹。親友のキサと一緒にいつも仲良く過ごしていた。二人はいろんな困難を乗り越えながらも、さらに仲を深めていった。そんなある日……

## 第1話：双子の私生活（前書き）

はい。こんにちわ。はじめまして。比奈乃です。サブタイトルとあらずじ、だいぶ区切りがおかしいのですが、お気になさらず（無理だ。）。。。

一話。。。色々とおかしなところ満載かと思われます。。。とにかく、こんなものを覗いてくださり、本当に有難うございます！ぜひ、ご覧になってください。

## 第1話：双子の私生活

～1～

その日、二人はいつもと同じように、おんなじ顔をして楽しく歩いていた。

後ろから、透明感のある、大きな声が二人の耳に届く。

「やつほ！アマネ！カサネ！今日もどっちがどっちだかわかんないやあ〜」

二人は走ってくる人影にあきれた様子で答える。

「だからあ〜。ピンクが天音<sup>アマネ</sup>で水色が笠音<sup>カサネ</sup>だってば！」「

説明が遅れたが、二人の名前は、<sup>ヒイラギ</sup>「柊」<sup>アマネ</sup>「天音」<sup>ヒイラギ</sup>「柊」<sup>カサネ</sup>「笠音」という。

二人は双子（ちなみに一卵性だ。）で、間違えられることなどは四六時中、時には。「どっちだ？ま、どっちでもいい。」といわ

れることもある。

なぜかと言えば、二人はいつも一緒だから、周りも、「どちらか分からなくてもどちらかは必ず自分が話そうと思っている相手なのだ。」と考え始めているからである。

かといって、何かが変わないと、親ですらどちらだかよくわからないほどに似ている2人は、いつつ、持ち歩いたり、身に着けているものを色違いにするようにしていた。

それなら服は同じでも、色で天音と笠音をみわけてもらえる。

しかし。。。。

どんなに言っても覚えてくれないのは、、先ほど二人に声をかけていた、

友人の、「狐澤<sup>コザワ</sup> 季沙<sup>キサ</sup>」である。

「まあ、、、そろそろおぼえてくれないかなあ!？」

「いちいち 言うの いやだあ! っていうか、いつつもワザト言っていない?」

「あれりゃく ばれちった?」

「季ー沙ーちゃん!!!」

いつものように始まる朝だった。。。

天音、笠音、季沙 三人は小学四年生で、ごくごく普通な暮らしを送っていた。。。

\* \* \*

三人が学校に到着する時間帯は大して余裕があるわけではない。

教室に入れば、たいていほとんどのクラスメイトは話に華を咲かせているころなのである。

三人が教室に入ると、いつもの事ながら、クラスメイトの楽しそうな声が沢山聞こえてくる。

そんな中、いくつかの音が、三人に向けて朝の挨拶をする。

「天音 笠音 季沙 おはよう!」

「三人ともおはよう!」

天音と笠音はいつものことで気にはしなかったが、季沙は気になるらしい、声をかけてきたクラスメイトに注意した。

「ああー!!!まーた落書きしてるう!黒板は落書き帳じゃないっていつてるじゃん!」

季沙はすっかりもので、悪いことには悪い、とはつきりと話すのである。

だからこそ、天音と笠音は季沙を頼りにしていたのだ。

かといって、天音と笠音は争いごとが嫌いなのだ。揉め事にならないように入り込む。

「季沙ちゃん。今日はいいじゃん。また次もやったら何か考えよ？」

「うん。そうしょ？ね？季沙ちゃん。」

天音と笠音の説得に顔かたないわけにはいかなかった季沙は、仕方ない、といった表情で、条件をつける。

「ん〜。。天音と笠音に言われちゃ、仕方ないなあ。。。んじや。また次やったら、罰として町内五周だかんね!!」

その条件に対し、落書きをしていた組は、脹れながらも了解した。

「「これでらくちやく」「」

天音と笠音は顔を見合わせて笑って見せた。

## 第1話：双子の私生活（後書き）

はい。。無事に一話終了。。。

なんかわけワカラン！ツていうきもちは抑えて抑えて。。。（コ  
ラ！）自分では評価できないものですので、なんともいえませんが、  
皆様のご期待に反さないよう、せいぜい頑張ろうと思っております！で  
っわ！第二話もお楽しみに！

## 第2話：双子の亀裂（前書き）

第2話に突入いたしました！

こんにちわ。比奈乃です。今回も、随分な駄作（苦笑・）

自信なんてものは欠片もございませんが、ぜひご覧下さい。

## 第2話：双子の亀裂

その日、2人の間に亀裂が入った。。。

パリンっ！！

爽やかな柊家の朝に起こった出来事である。

その日、笠音<sup>カサネ</sup>はちよつとした不注意で天音<sup>アマネ</sup>がこのごろ必死で作っていた、綺麗なガラスの板がしき詰められた写真立てを床に落とすてしまった。

ガラスの写真立てが落ちた衝撃に耐えること出来るはずがなかった。

静かだが突き刺さるような音と共に綺麗なガラスは砕け、儂くも地に落ちる。

「ど・・・どおしよう・・・。コレって、天音がこのごろ頑張つて作ってたやつだ。割った、なんて言ったら・・・天音、なんて言うだろ。。。」

笠音が戸惑っている暇などはなく、すぐに音を聞きつけた母親が走ってくる。

「どうしたの！？だいじょうぶ！？怪我しなかった？」

やさしげに声をかける母に、笠音はとにかく縦に頷いているだけだった。

そのすぐ後、嫌な予感を感じた天音がいかにも不安そうに走ってきた。

「笠音！……あつ！コレ……」

どんと悲しげになってきた天音の顔を見た笠音は黙っていることが出来なかった。

「あ・天音！！ごめんなさい！大切に作ってたの知ってる。だから……だからこそ、ホントにごめん……。私！作り直すのしつかり手伝うよ！なんなら、全部作り直してあげるから！」

笠音は精一杯のココロで謝罪を述べた。

「笠音……。これはね、季沙<sup>キサ</sup>ちゃんのお誕生日のプレゼントに  
って思ってたの……。笠音だつて、もうお誕生日プレゼント  
ト作り始めてるでしょ……。なら、材料をかうお金なんて無いはず  
じゃないの。作り直すなんて……。っ……。簡単なことみたいに  
言わないでっ！！……。私、もう学校いく……。からね……。」

天音は笠音の思っていた以上にショックを受けていた。天音が言葉の途中から声を震わせながら言っていたこと、笠音はソレを重く感じた。

笠音は、いつも以上に重く感じる足を動かし、追いかけるように学校へと向かっていく。

\* \* \*

学校に着いてから、天音と笠音は一言も会話をしていなかった。天音は、笠音と目を合わせようともしなかった。

その異常さに周りが気付かないわけが無かった。

なぜなら・・・そう、2人はいつも一緒だったからである。

## 第2話：双子の亀裂（後書き）

はい！2話も終了です。。あらすじで言う、、、困難ってヤツですかね；

つくづく、、文章がへたくそ〜と痛感いたしました；

これから、どしどし鍛えていこうと思います。

第3話もご期待いただければうれしいのですが；

でわ、3話でまた会いましょう。

### 第3話・双子のココロ（前書き）

はい。三話に突入いたしましたあ〜!!

こんにちはわ。比奈乃です。

期待できるものではないかもしれませんが、ぜひ!ご覧になってください。

### 第3話：双子のココロ

二人の以上に一番先に気付いたのは、親友にあたる季沙<sup>キサ</sup>だった。

いつもとは違う二人に戸惑いを感じながらも、季沙は一人で座っていた笠音<sup>カサネ</sup>に声をかけた。

「どうしたつての？笠音。なんか、あんたたち今日おかしいよ？  
・ねえ！笠音つてば！！」

反応がはつきりしない笠音に少しの苛立ちを感じながら季沙は声を少し荒げていった。  
勢いで掴んだ笠音の腕が微かに震え始めた。

顔をうつむかせていた笠音がゆっくりと季沙を見上げる。そこには、いつものような暖かい笑顔はなく、黒とも茶色とも言えない髪の間から、綺麗な瞳が覗いた。だが、その目は、真つ赤にも見え、普段以上に濡れていた。今にも溢れだしそうな水を必死で堪えている様子だった。

「季沙・・・ちゃん・・・。私・・・天音<sup>アマネ</sup>・・・怒らせちゃった・・・。  
。謝ったつて謝ったつて、謝りきれない・・・。私・・・天音を・・・  
悲しませた・・・。」

堪えていたものが抑えきれなくなったのだろう。笠音の目元には温かい水が流れた。

その状態を見て、季沙は、軽く動揺しながらも、笠音を励ました。

「何があつたかは知らないことだけど、天音も笠音ときつとおんなじことを考えてるはず。」

だって、あんたたちはいつも一緒だっただじゃん！」

その言葉に、笠音は首を横に振った。

「・・・そんな訳・・・ない・・・だって・・・私・・・天音があんなに大切に作ってた・・・が・・・らす・・・の・・・」

笠音の言葉はそこで途切れた。

\* \* \*

季沙は、上手く笠音を落ち着かせた後、天音を探した。

天音が見つかるのに、そんなに時間はかからなかった。

天音は、教室から出て、少し右に進んだ窓際で、独り、外のグラウンドを眺めていた。

先ほどの笠音とは一風変わって、ただ無の表情で、グラウンドを眺めている。

「天音？なあにしてんのっ？」

季沙はいつもの調子をキープしながらも天音に近付いた。

「あ。季沙ちゃん。うん。外でね、皆が遊んでるのを見てたの。楽しそうだなあって。」

天音は笠音とは対照的に、明るく季沙に接した。

「ところで、今日は天音、笠音といっしょじゃないんだね。」

何気なさを作り、季沙は天音に問いかけた。

「うん。今日ね。朝、ちょっと私がひどいこと言っちゃって。そんなに怒ってなかったのに。あんまり悲しくも無かったのに……。いろいろと、笠音にひどいこと言っちゃって。」

えへへ……。なんか、あんなに必死になってくれた笠音が、なんでかな？みてて悔しくなったの。ほんと……。小さい子みたいだね。」

天音は季沙の問いに、薄い笑みを浮かべながら答えた。だが、その笑みには、どこか悲しさを感じるものがあつた。

季沙は、それなりに天音と会話し、その場を立ち去つた。

そして、季沙は、こころに確信したのである。

二人が、お互い、今日のこの状況を、今までとおなじようにな  
ることを望んでいる、と。

\* \* \*

季沙は、なんとしても二人に仲良しで居てもらいたい。そんな願いから、説得を始めることにしたのだ。

まずは笠音だ。笠音はひどく自分を責めている。自分を追い詰めすぎたようにも感じる。そんな笠音の説得は、多少困難だろう。

次に天音。天音は、自分の言ったことに罪悪感を感じているようだが、変な意地をはっていて、おそらく自分から笠音に声をかけたりしないだろう。それはそれで厄介である。

二人とも難しいことがある。

だが、季沙はこのままでは納得できないのだ。

「はぁ……。なんとかしなきゃ。でも、何でこうなってるんだろ……。」

季沙は独り言を言いながらも作戦を立て始めた。

\* \* \*

一通り作戦内容を確認した後、季沙は、一人で、教室からの外の景色を見つめていた。

そこからは、そんなに大きくは無いガソリンスタンド、四車線の車道、いくつか立ち並ぶ民家など、ごくごく平凡な光景が広がっている。そんな中、一つだけ周りと違った雰囲気のある建物がある。その建物は、とても大きいひとつの教会だ。

季沙は、「神」なんて存在を信じるたちでは無いのだが、その日はなぜか、教会に向かって祈りをささげていた。今の季沙の願いはただ一つ。

二人がまた、いっしょに笑ってくれますように

### 第3話・双子のココロ（後書き）

ここまで読んでくださって有難うございます！

今回は、双子のココロを知った季沙が感じたことを、どこか季沙の視点で見たものとなりました。

まだまだ話は始まったばかりなので、これからも頑張りたいと思います！

でわ、また、四話でお会いいたしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1119c/>

---

\*花と水\*

2010年10月22日08時44分発行